

# Interview

## 駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

### アルゼンチン共和国

ルベン・エドゥアルド・ミゲル・テンポーネ  
駐日アルゼンチン大使

## グリーン水素やリチウム開発は ビジネス・チャンス —牛肉、タンゴ、サッカーだけではない！



アルゼンチン共和国のテンポーネ駐日大使は、ラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、昨年（2023年）12月に就任したミレイ大統領の政権運営、外交・通商政策、日本との関係、サッカー交流等について見解を表明した。同大使は、1988年外務省入省、在米国大使館公使、国際経済交渉局長、G20担当大使等を歴任し、2023年10月から駐日特命全権大使。インタビューの一問一答は次の通り。

—大使は駐日大使として着任されて約1年になりますが、日本についてどのような印象をお持ちですか。これまでの日本滞在で最も印象深い思い出は何ですか。

日本の印象はたくさんあります。そのすべてが心地よく、時とともにより多くの印象とつながっていきます。毎日、日本の文化、習慣、伝統、日常生活における技術革新の素晴らしさ、そして、とりわけ日本人の丁寧さと親しみやすさに驚かされています。

日本は伝統を守りながら近代化を成し遂げた数千年の歴史を持つ文明国ですので、私は常に大きな関心を抱いてきましたが、それを日常的に体験できるとは思ってもみませんでした。東京の街角で、着物や伝統的な服装が、世界のファッショナブルな服装と共存しているのを見るのは、ユニークな体験です。

日々、政府関係者や一般の方々から友好的に歓待いただき、とても感謝しています。このような歓待は、私が幸運にも訪れることができた地方自治体、例えば、毎年フォルクローレ・フェスティバル「コスキン・エン・ハボン」が行われる川俣町（福島県）や、古くから交流のある長田小学校が所在する境町（茨城県）のように、私の国と関係の深いところでも顕著に感じられます。

これまで多くの地方を訪れましたが、それぞれに特徴があり、その多様性や豊かさ、代表的な料理に感心させられます。広島ではお好み焼き作りを体験し、愛

知では陶芸、京都では金閣寺などについて学びました。

また、驚いたことに、東京を歩いていて、ブエノスアイレスの「ミロンガ」（タンゴを踊るスペース）のようなタンゴ・ダンス教室を何軒も見つけ、子供たちが上手に練習しているのを目にすることは予想していませんでした。私は日本でアルゼンチンを発見しています。

—昨年12月に就任したミレイ大統領は、自由至上主義者（リバタリアン）と自称し、前政権の政策とは大きく異なる自由主義的な経済政策をとっています。ミレイ政権の主な政策とその狙いについて教えてください。また、労働組合などが反対しているようですが、今後の見通しはどうですか。

2023年10月の選挙で、アルゼンチン国民のほぼ56%が変化を選び、高インフレを背景にアルゼンチンを深刻な貧困レベルに導いてきた政策の軌道修正をミレイ大統領に託しました。これにより、一連の課題への挑戦が始まりました。

アルゼンチンには、教育を受け、創造的で起業家精神旺盛な人々がおり、世界で最も難しく競争の激しい分野でも成功を収めています。また、世界で最も肥沃な国土のひとつであるアルゼンチンは、豊かな天然資源、エネルギー資源、農牧資源に恵まれ、リチウムと天然ガスの豊富な埋蔵量があり、食料や加工食品の主要な生産拠点となっています。バイオテクノロジー、原子力、



ブエノスアイレス市の7月9日通りの夜景（Visit Argentina 提供）

宇宙分野の優れた技術を有しており、知識集約型サービスや製造業の重要なニッチ分野で競争力があります。

しかし、大きな課題は、これらの生産力をすべて発揮させ、持てる潜在力をアルゼンチンのさらなる発展と富の拡大につなげることです。このため、現政権は政策の中心軸を自由、市場、自由なイニシアチブの尊重にしています。アルゼンチンは何十年もの間、保護と過剰規制の国でしたが、新政権が重視するのは、規制緩和と対外開放です。

もうひとつの重要な問題は、国家の役割と規模です。国家が主導的かつ促進的な役割を果たすべきなのか、それとも投資に見合った規制の枠組みを提供し、あとは市場に任せるべきなのか、ということです。もちろん、すべてのセクターが政府の政策方針に全面的に賛同しているわけではありません。しかし、必要とされる改革の機は熟し、実現への道筋がやがて見出されるでしょう。なぜなら、アルゼンチンが直面する現状において選択肢は多くないからです。

私たちは、民主的かつ共和的な政権交代を重視しています。それは、多様な視点の提示を通じ、議論を豊かにするからです。

—ミレイ政権は、外交政策においても、前政権とは異なり、BRICS 加盟を白紙に戻したほか、中国やロシアよりも米国や欧州との関係を重視する方針を打ち出しています。今後の外交政策の展開について教えてください。

ミレイ大統領が提唱する路線変更は、複雑かつ再編されつつある国際情勢の中で行われます。経済的緊張を伴う伝統的なジオポリティックスが復活する一方で、世界貿易機関（WTO）を中心とする多国間貿易システムが事実上麻痺し、バリューチェーンとサプライチェーンの再構築が図られています。

このようなシナリオの中で、私たちは、持てる資源を効率的に活用し、アルゼンチン国民の大多数の利益と発展を促進し、憲法に謳われている価値観を維持するために行動しなければなりません。

その意味で、国際的な政治・経済フォーラムに参加するに当たっての政府の優先順位は、経済協力開発機構（OECD）にあります。加盟プロセスが開始されれば、国の公共政策は、OECD の基準に適合する方針を採用することになります。私たちは、日本が OECD 加盟 60 周年を迎えた今年、このプロセスを開始できることを願っています。

要するに、一群の国々との関係がより緊密になることは、地政学的変化への対応であり、国際社会の新たな課題や状況に対する外交政策の適応を示すものです。どの国も「島」のように孤立した存在ではあり得ません。

—貴国は農業大国であるとともに、鉱物資源なども豊富です。世界の脱炭素化の動きを睨みつつ、貴国におけるシェールガス、リチウム、グリーン水素等の開発・利用に関する最近の動きについて教えてください。



アルゼンチンは、水素の世界的プレーヤーとなるための必要条件を備えています。アルゼンチンには、太陽や風力でエネルギーを生産する資源に恵まれ、大量の水も埋蔵されています。現在のエネルギー生産の半分以上が天然ガスによるものであり、これはブルー水素を製造するための基礎となります。これらを念頭に、私たちは日本の専門機関と科学技術協力を強化し、エネルギー転換分野での投資を促進する包括的な協定を結ぼうとしています。

重要鉱物については、アルゼンチンには世界的なエネルギー転換の鍵となる銅とリチウムを市場に供給する潜在力があります。2025年までに、アルゼンチンの鉱物輸出総額は現在の2倍以上になり、2030年までにアルゼンチンは世界第2位のリチウム輸出国になると予想されています。2010年から豊田通商のリチウム生産プロジェクトが稼働しており、採掘されたリチウムは福島県双葉郡楢葉町にある豊通リチウム株式会社の水酸化リチウム生産プラントで加工されています。より多くの日本企業や公的機関が、リチウムや銅の新規プロジェクトに参加することを期待しています。

農業の分野では、プロジェクトの持続可能性と将来世代への継続性が重要です。この分野では、アルゼンチンと日本の協力の余地が非常に大きく、オリーブオイル、蜂蜜、ワインなどの有機食品・飲料、またエビなどの水産物が有望です。加えて、アルゼンチンは、世界的な検疫基準に準拠した最高品質の牛肉を生産しており、日本政府が一刻も早くアルゼンチン産牛肉の日本市場への参入を完全に可能にすることを期待しています。

アルゼンチンは、日本との原子力平和利用における二国間協力の深化に強い関心を抱いています。それは相互に有益なものであり、例えば、放射線医学、放射性同位元素の製造、日本で進行中の主要プロジェクト

へのアルゼンチン企業の参加などが考えられます。また、除染や材料の調達、活性剤の有効利用に関する共同開発などで協力の可能性があります。

アルゼンチンは、農業生産が主体であり、二酸化炭素の排出量は自然に吸収される量よりも少ない。気候変動が加速している今、市場を歪める補助金なしに環境に優しい農業生産を行うことは稀有なことです。アルゼンチンは、100%グリーンな生産を行っているごく少数の国の一員であることを誇りに思っています。

ー日本とアルゼンチンは長年にわたり良好な関係を維持していますが、現在の二国間関係をどう評価されますか。今後の可能性や課題についてどうお考えですか。

アルゼンチンで生産される上質なワインのように、日本との二国間関係も時とともに熟成されています。昨年、私たちは外交関係樹立から125年の歴史を祝いました。私の仕事は、二国間の交流が深まり、貿易・投資・協力が拡大し、両国の経済成長に寄与するよう協力することです。

国際的な主要課題が議論されるG20のような国際的フォーラムも含め、両国が協力し合う余地は非常に大きく、それこそが両国の関係を戦略的グローバル・パートナーシップに高めるための根拠になると考えます。

ミレイ政権は、日本と価値観や利益を共有する政策を継続し深めていくでしょう。したがって、両国は協力ネットワークを拡大し、強靱なバリューチェーンを構築し、エネルギー転換にともに取り組まなければなりません。両国は、国際関係や国際経済・貿易について、よく似た世界観を共有していますので、二国間関係においても共通のアプローチをとることができます。

現在の状況は、メルコスールと日本の経済・貿易関係を強化するためにも好都合です。貿易協定交渉、メ



メンドーサ州トゥブングートのブドウ畑の冬 (Visit Argentina 提供)



ワイナリーのワイン樽 (Visit Argentina 提供)

ルコスール農産物の市場アクセス、衛生植物検疫規律、投資、サプライチェーン、エネルギー転換などで進展が期待されます。

先に述べた地政学的な変化を考慮すると、アルゼンチンと日本の関係はより深いものになるはずであり、二国間関係のダイナミズムを加速させるべきです。

ー日本とアルゼンチンとの関係の進展に向けて、大使として、特に力を入れて取り組んでおられることは何でしょうか。

私は、日々、官民を問わず日本社会のさまざまなセクターと会合を行っていますが、そのような交流の中から、二国間関係の拡大につながるプロジェクトやアイデアが生まれています。先日、ディアナ・モンディーノ外務大臣が公式訪問し、日本の政界、実業界、諸機関と広範な実務的議論を行いました。その機会に取り上げられた諸テーマが、大使としての私の優先課題となっています。

日本はアルゼンチンにとって重要なパートナーであり、エネルギー転換、重要鉱物、水素経済の発展等における戦略的なグローバル・パートナーです。この分野での協力や投資の拡大は、大使館の活動における優先事項のひとつです。

両国の文化は多くの面で相互に影響し合っています。そのため、文化交流やアルゼンチン人アーティストやミュージシャンの日本公演は、相互理解を深めるものとして、非常に重要視しています。

最近、グリーン経済やデジタル・トランスフォーメーションの要素を取り入れた「カイゼン」をラテンアメリカ地域に広めることを目的とした「カイゼン・タンゴ」技術協力プロジェクトの新バージョンが開始されました。このテーマは、大使館が最優先課題としているエネルギー転換の目標にも合致しています。

ーアルゼンチンは、2022年のサッカーワールドカップ・カタール大会でリオネル・メッシ選手を中心に劇的な3度目の優勝を飾りました。日本とのサッカー交流の可能性についてお聞かせください。

2022年ワールドカップの勝利は偉大な業績でした。パリ・オリンピックへのモチベーションと勢いを与えてくれました。アルゼンチンは2004年と2008年の2度、サッカーでオリンピック・チャンピオンになったことがあります。2008年大会では、若いメッシがチャンピオンになりました。世界中にメッシやアルゼンチン代表チームのファンがいて、その活躍が多くの国で称えられ

ているのは誇らしいことです。

近年、日本ではサッカー、特に女子サッカーが大きく発展していますので、両国間の連携や交流を進めるのは有意義です。去年は、両国の代表チーム・レベルの試合がいくつか行われました。アルゼンチンの女子代表チームが来日して、福岡で「なでしこジャパン」と親善試合を行い、U-22男子代表チームは静岡で日本代表チームと試合を行いました。フットサルでは、12月に東京と北海道で2度、日本代表チームと対戦しました。

サッカーにおける協力と交流は、さまざまな形で多層的に行われています。ここ数か月の間に、4人の若い日本の女子選手がアルゼンチンに行きましたが、これは日本の女子サッカーのレベルの高さを示すものです。

ー『ラテンアメリカ時報』の読者に対してメッセージがあれば、お願いします。

私が伝えたいメッセージは、アルゼンチンと日本の二国間関係は幅広く、多面的であるということです。そして、私の目標は、未だ知られていない分野に光を当て広く知ってもらうことです。私たちはよく、アルゼンチンは牛肉、タンゴ、サッカーだけではないと言いますが、現に、日本との間では、エネルギー転換、食料安全保障、原子力協力において協業する相互補完的な利益があると考えています。

(注) 本インタビューのスペイン語全文は、ラテンアメリカ協会ホームページ英語サイトに掲載しています。

(ラテンアメリカ協会副会長 佐藤 悟)